団結―批判―団結

佐野茂樹

集会に結集した同志のみなさん！

私は最近の連合赤軍森指導部による同志殺し、リンチ虐殺について、共産主義者はどのような態度をとるべきか、ブルジョア社会にいかに断乎たる反撃を加えるべきかを明らかにし、私の集会への連帯アピールとしたい。

①森指導部による同志殺し、リンチ虐殺は誤まった行為であり、誤まった指導であり、反革命的行為に転化したものである。このことは疑問の余地はない。森指導部の行為を絶対に擁護することはできない。いかなる言葉でも、組織防衛主義、官僚的保身を許してはならない。森は「上申書」で「同志たちの死を人民にせずにはおかせない」と結っている。なんということだろう。「同志たちの死」ではなく、同志たちへの言語を絶する「リンチ殺害、虐殺」ではないのか。誠実な同志たちが鍛えられた戦士が、人民への献身的な革命家が失なわれた。これはブルジョア社会のあらゆる腐敗・堕落・暴力の抑圧が革命家社会、直接には連合赤軍内の弱点と結びつき、その弱点が危機的に爆発し、革命組織内部から発生した問題である。これはプロレタリア革命の路線と作風の小ブルジョア的誤

まり、革命規律の破壊である。革命規律■の破壊は、殺された同志たちの側にではなく、森指導部にこそある。

② この事件がどれだけの衝撃を与えたか、どのようにブルジョアジーに陣地を明けわたしたか、日和見主義の我もの顔を許しているか、命かけ誠実ある苦闘する最左翼革命家、活動家、人民に打撃であったか、あらためて言うのはやめよう。

69年敗北以来の苦闘の二ヶ年の中でようやくひらかれた71年階級闘争の地平、とりわけ9・16三里塚の高みから、この教訓から全戦線をたてなおし進撃するべき態勢は危機にヒンしているだけではない。自衛隊沖縄派兵をはじめとするこの帝国主義国家権力の中枢をめぐる政治的大会戦に直面して、満身に傷を負うブルジョア権力に政治的優位を与えただけではない。中国・朝鮮、キューバ、ベトナムをはじめとする数十年の革命戦争の信じられないほどの自己犠牲と英雄主義で闘いとられた成果、その前進が帝国主義心臓部の危機をおしあげ、帝国主義心臓部の革命条件をありとあらゆる帝国主義、権力、ブルジョア社会の生命のない没落を運命づけられたモラル的危機としてつき出してきているとき逆に、このブルジョア社会の腐敗を革命組織内部に深く構造化し、革命家組織のモラルの破産に転化しただけではない。67年10・8以来の主体的成果のみならず、日本革命的左翼14年間の全成果が、危

機にヒンしている。前進とともに共有した様々の偏向、混乱、その放置、肥大化によって、そこにブルジョア社会はガンのように喰いこんで、まさにブルジョア社会が日本革命的左翼の一時代の全てを清算しようとしているのである。密集する反革命は、棍棒、ピストル、ガス銃、拷問、カンゴク、処刑だけではなく、革命家組織の内部的弱点をついて、混乱の危機的爆発としてあらわれているのだ。真の革命家のとるべき道はただ一つ、プロレタリア人民のあらゆる批判に耳をかたむけ、歴史的に累積された内部の腐敗を腐敗として えぐり、根底的に自己切開し、この事態をあくまで〈反面教師〉として学びつくし、混乱にみちた今日の革命的左翼の一時代を自ら総括しつくし終らせ、ブルジョアジーによる清算と圧殺に対して、真にプロレタリア革命のボルシェヴィズムの道に推転することである。

③ 私は、今回の事件を〈反面教師〉として前進するためには、共産主義者の堅固な、確信にみちた、原則性ある態度、闘いを、おそれず全人民の前に公開し、全人民的規模の思想・組織闘争一整風として押し進めこのルツボの中で党的整風を進めることだけ■が正しいと考える。密室思考、秘密処理は、さらに堕落を促進させるだけであり人民をバカにする態度であり権力の攻撃にイショクするだけである。この闘いには直接には四つの要点が必要だと私は確信する。

第一は、連合赤軍の路線の偏向をただすことをはなれては問題解決はないこと。

第二、だが特殊に〈革命・革命党の作風〉をただすこと決定的に重要であること。

第三、この事件は直接には、連合赤軍の内から発したが、この破産的弱点はひとり連合赤軍のみでなく、もちろん赤軍派・京浜安保共闘のみでなく、革命的左翼全体の内部弱点の凝縮した爆発としてとらえること■だけが正しいこと。

第四に、それに、プロレタリア人民による革命の運命をかけた糾弾、この助けをかりて、この糾弾に学んで自己批判し、共産主義的に再建すべきなのは、連合赤軍、赤軍派、京浜安保共斗と全く同様に、全く等しく我々革命的左翼すべてであること、―― この態度を実践につらぬくことが我々の責任であり、問題の核心である。この事を私はかたく確信する。

（短い時間であわただしく、しかし力をこめて書き進むうちにすでにあまりにも長くなってしまった。以下のことこそ眼目だが、簡潔に記すにとどめなければならない。）

④ 路線の誤まりについて。

一言で言う ――戦略上の軍事無政府主義、組織上の戦斗団主義、戦術上の遊撃戦主義、この混然一体化であり、情勢を無視し、政治的任務の環をはなれ、単純な軍事的見地に陥り、軍事の一人歩き

となったことである。私は大菩薩の志向を支持する、(これのみを、これが、武装蜂起だとする主観主義は別として69年秋に要求された武装闘争として支持する。)だが、こゝでの武闘は明白に優略、反革命と対決してきた革命的左翼総体の歴史的基盤に直接に結合しており、秋に集中する全人民的政治昂揚その求心性と直接に結合し、ひきあげるものだった。かゝることこそ、有効であり、正しく絶体に必要だったのだ。この敗北から、擬制的に純化する道、こゝから混乱は肥大化した。69年秋の正しい継承は、三里塚9・16に代表される武装斗争と大衆路線の結合、発展である。私は路線をめぐる混乱の克服を、決して観念的な論として追求せず、71年階級斗争の前進がどのように、誰によって闘いとられたかの総括をふまえ、この現実の地平をもって実践的に検証する見地から行なうように、示唆するにとどめたい。

⑤ 作風について。

革命組織内部の矛盾、一般に人民内部の矛盾の解決を、敵との斗争と同じ形態で行うこと、がどれだけ誤りであるか、すでに赤軍派の同志が多く指摘きしている。この点にかぎらず、私は赤軍派の同志がとくに獄中の多くの同志が、決して自己居直りを許さず、沈黙、とじこもりを許さず、大胆に自己批判的切開をはじめ、公然たる人民の批判を受けとめると共に、権力、資本制社会に対する

共産主義者として思想的再武装のために闘っていることに敬意を表する。これこそ、かくとくされるべき作風なのだ。赤軍派のもっともすぐれた同志たちが、この様に〈反面教師〉からすでに学んで前進しはじめていること――こゝにこそ、革命的作風に関する百の説法よりも一つの生きた実例が生みだされつゝあることに注目せよ！

私は断乎として、この闘いを支援し連帯し協働するだろう！　いや、すでに我々は共働しているのだ！

⑥革命的左翼全体の問題であるということについて。

赤軍派の革命的同志たちの真剣な闘い、堅固な前進と成長に私は深い感動をすら覚える。だが問題は、いやしくも革命的左翼、とくにその諸党派は、自分たちこそが、よりいっそう根源的な自己批判とボルシェヴィキ的再武装をこの問題を契機としてつきつけられていることに、全く無感であるか、あるいは、全く意識的に回避していることである。連合赤軍森指導部に対する自己批判なき弾劾、攻撃批判は、その思想的腐敗において、日本共産党の立場に転落するものである。そして沈黙は、この問題を他人事としてきりすて、自己批判を回避し、この最高最大の思想闘争任務を放棄するものである。こゝにこそ、いっそう深い堕落への道がある。(諸党派の路線についてはこゝではふれない)この作風をこそ大胆にうち破るべきことを、あの

〈反面教師〉は教えているのだ。このように私が強調すること、がどれだけ深い根拠をもっているかは、いわゆる内ゲバ――暴力的党派斗争、これが体質化した暴力的党派斗争主義があくびくまんえんし、リンチ、テロ、殺人が常態化していることがはっきりと示している。連合赤軍の内部殺人は、このような累積されてきた悪しき小ブル主観主義的作風を〈土壌〉としてこそあるのだ。この点を絶体に見おとしてはならない。暴力的党派斗争主義との闘争、この克服、これとの絶縁われわれはこゝまで徹底して闘いを進めるのでなければならない。これは新たな革命的結束と進撃のための絶体条件である。連合赤軍のリンチ殺人としての危機の爆発、これを生み出した内的要因、――これは革命的左翼全体にもっと歪少に存在するのだ。だから私はあえて、連合赤軍の危機的事態を我々の、私の内的弱点、危機として受けとめ、共に苦闘し、かちぬくべき私の態度を押し出す。

これは絶対に引きさがってはならない線である。これが再生するプロレタリア革命党が、堕落する小ブル急進左翼かの絶対的な分岐点である。

殺された同志たちの血を一滴もムダにはできない。同志たちへの追悼を、なによりも実践課題――沖縄派女阻止――を絶対はなれず、武装斗争と大衆路線の結合・発展を死守し、自己批判、思想的再武装を押し進めよう。

赤軍派の同志諸君ならびに連合赤軍の同志諸君をして友人たちへ！

―重信　房子―

さらば連合赤軍の同志諸君！

赤軍兵士の一人として、夢と勇気を込めて、訣別を宣言する。　決別とは、真の革命戦争を準備すること。　訣別とは、不退転の決意で自らを検証すること。　たとえ銃撃戦の開始をもって、人民に武装の魂を伝達したとしても、自らの体内に共産主義なくばなり、それは我々がめざす革命戦争ではない。　敵との直接的な緊張関係を通してでなく、味方内部を規律によって、共産主義化しうるという幻想は、悪しき独裁を助けるだけだ。　我々はこんな革命はいらない。

仲間を殺した連合赤軍の同志たち、今だ、同志と呼ぼうとする私の気持が判りますか。　仲間を殺す権利など、誰も持ちあわせてはいない。　あなたたちの、革命の私物化を斗う同志たちは、決して、許してはいないだろう。　たとえあなた達が、数人、数十人の敵を殺したとしても、仲間を殺した罪は、償えないだろう。

殺害に責任ある同志たち、ブルジョア裁判によってではなく、人民の手によって裁かれることを望んでほしい。

我々は、同志としてブルジョア裁判で、あなた

達が処刑される以前に、同志として我々の手であなた達を、救くことを義務として負うだろう。

同志諸君、今だ困難をのりこえ、この責任を同様に受けながら尚、革命戦争を継承している同志諸君、中国革命の困難な途上を覚えていますか？「『隊伍をととのえなさい。隊伍とは、仲間であります。仲間でない隊伍が、うまくゆくはずがないではありませんか。』我々は、隊伍をととのえた。全軍は、91人と、72挺の銃をのこすのみとなった。多くの者が失われたが、残った者は精鋭中の精鋭であり、自覚を持ち、立場をわきまえ、■どの様な、困難と欠乏にも耐え得る戦士、すなわち、もはや、わかち難い"革命の志"に結ばれた一心同体の仲間のみであった。」

隊伍をととのえなさい。隊伍とは仲間であります。この言葉を叫びながら、同志達と、こんなにもなくせつなくしてしまっている無念に不覚にも涙が流れてならないのです。覚えていますか？議長を中大にとられ、関東学院に集結した時のことを。お金もなく、斗う武器もなく、しかしながら、"革命の志"に結ばれた一心同体の仲間達は、心には余裕があったことを。

覚えていますか？一人の同志の言葉を、「例え、赤軍派が存在しても『リンチをする組織』『仏議長を权力に走った組織』として永遠に批判されるだろう。これに対して、仏議長を奪い返す

戦術も練った。だが、事実は、事実であり、例え赤軍派を解散しても、「スネに傷を持っている。」過去が、我々からなくなる訳ではない。

赤軍建設は、現赤軍派以外のものによってしなければならないのか？我々は一生「反革命」でなければならないのか？いや、例え、「スネに傷を持って」いようとも、ここで赤軍派を解散してはならない。秋の蜂起は、誰がやるのか。我々は自己批判しよう。我々■指導部は、右派でも、中間派でもない。中央委員会、その下の総制委員会で死刑を受けても良い。そのことで、はっきりと階級的に■■自己批判します。にもかかわらず、現在の赤軍派を解散してはならない。指導部は、トロツキーや、ボルシェヴ■キの様に殺されても、それは「スネに傷」を持っているから、仕方がないが、君たちは、立派に堂々と育ってよい。死んではならない。69年秋の決定的な歴史の転換に蜂起で、応えるのだ。今、芽をふいたばかりの赤軍、日本階級斗争と、世界の歴史の一切の利益を表現している赤軍の芽を、ここで殺したらまた、歴史は、数十年を全地球的地獄の世界とするだろう。第二次世界大戦以上の未曽有の破局！否！否！否！」

（赤軍結成の歴史「世界革命への飛翔」より）

あらゆる友人達に、自己批判を通して、わかち合う地平を確信する為に、どんなに痛苦であろう

とも始めようではありませんか。

同志達、唯一このことによって、殺された仲間達の無念を、情念として出発することが出来るのです。

そして、斗う友人達。

現在の新左翼Mの純化された形態を赤軍派が、いきずっていたことも事実です。先行した現実を同様に、斗う友人達も自らの検証の地平として、みつめようではありませんか。

あらゆる党派、あらゆる斗いの担い■手が、自らのものとして再点検しない限り、大なり、小なり、こうした終焉に向うにちがいないと思うのです。

党一軍の共産主義化の斗いは、味方階級の普遍的な負として敵との攻防を通して、創造されるものであり、死を決意した斗いは、同志の命がどんなに尊いものであるか、現実に銃撃戦を斗いぬいているパレスチナの同志達から■教えられています。

パレスチナの斗う同志達は、日本の斗いが、インターナショナルといいつつも、実は、ナショナルな情念価値観念にとらわれていることに、悲しみと、驚きを表現しています。

私は、赤軍兵士の一人として、世界の痛を、実践的に逆流させることを、断固として、接続させるでしょう。

獄中の同志達、この苦斗を乗り越える主体を、日本の斗う同志達と共に着実につづけることを約束します。

同志達、斗いの中で抱き合える日を確信します。

―以下、後半部分省略―

㊟ 本文は、3月14日付でベイルートより寄せられた同志重信房子の書簡であり、日本赤色救援会を経由し、同盟（赤軍派東京都委員会）あてに届けられたものである。尚、対 权力上、後半部分を省略したこと、然るべく理解されたし。又、先日週刊読売に掲載された、「重信房子の手記、云々」の件に付いては、我々とは一切関与しないものであり、その旨、現在、同志重信に対し、釈明を求めていることを、確認されたし。

共産主義者同盟赤軍派
東京都委員会
（4月12日）

★るっぷるNO.1　（250円）　A5版
―日本赤色救援会復権報告集―　96頁
★議案書、行動綱領、規約
活動報告、赤軍派アピール集。